



文学の視点から現代の生き方を問い直す

人間文化学部 国際文化学科
講師 栗原 武士 (くりはら たけし)

連絡先 県立広島大学 広島キャンパス 1823 号室
Tel : 082-251-9954
E-mail : tk-kuri@pu-hiroshima.ac.jp



専門分野： 現代アメリカ文学 異文化コミュニケーション

キーワード： 現代アメリカ文学・アメリカ文化、ジェンダー、白人性、消費文化

● 現在の研究について

私は学生時代からずっと現代アメリカ文学、特に1980年代を中心とする短編小説の社会的な解釈・分析に取り組んできました。主に研究対象としたのは、レイモンド・カーヴァーという、当時のアメリカ文壇における短編小説の一大ブームを巻き起こした作家です。

アメリカ北西部の労働者階級の一家に生まれたカーヴァーは、アルコール依存症や貧困、家庭不和など、低所得層に属する人々の暮らしぶりを、平易な文章で淡々と描く作風で人気を集めました。ヒッピーや黒人運動に代表される1960年代の対抗文化ののち、1970年代以降のアメリカ社会は、一般的にふたたび保守化の道をたどり始めたといわれますが、そのような「強いアメリカ」の再興をめざす保守的な言説が飛び交う当時のアメリカにあって、カーヴァーが作品中に描いた貧しいアメリカ人の姿は、いわば「陰のアメリカ」を浮き彫りにしているといえるでしょう。カーヴァーの作品は、「ミニマリズム」や「ダーティ・リアリズム」などのキャッチフレーズとともに、アメリカ短編小説の復興の一翼を担うこととなります。

カーヴァー作品の優れた点は、ときおり「貧乏でも、べつにいいじゃない」という開き直り（良い意味で）をみせる登場人物が描かれていることだと私は考えています。高価な車に乗って、いいものを食べて、最新のスタイ

ルの服を着て・・・そういう消費文化にあこがれつつも、現実には厳しい経済格差にはばまれ、貧乏なままの自分に嫌悪感と羞恥心を抱いてしまう。そういう消費主義というイデオロギーから逃走し、ある意味とっぴで奇矯な行動に小さな幸福を見出す登場人物たちを、カーヴァーは好んで描いたように思います。

現在、世界ではグローバリズムの掛け声のもと、富める者はますます富み、貧しい人々はますます貧しくなるという経済的不均衡が問題とされています。これまで以上に生きづらくなりつつある現代社会に暮らす私たちにとって、カーヴァーの描く日常の小さな幸福のかたちは、多様な生のあり方を考えるためのヒントとなるのではないのでしょうか。

● 今後進めていきたい研究について

これからはもう少し研究の裾野をひろげ、カーヴァーと同様に、大企業中心主義や消費文化、グローバリズムといったイデオロギーに対抗する、あるいはそこから跳躍するような生のありようを提示する文学作品を、自分なりに分析し、社会に紹介していきたいと思っています。東日本大震災を受けて、今の社会のあり方と、私たちの生き方に疑問を抱いた方も多くおられると思います。市民公開講座などを通してそのような方々と対話を深め、文学の面白さを一緒に掘り起こすことができれば幸いです。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

アメリカ文学・映画を対象とする市民講座等。